No. 95　October 1 2016

触媒懇談会ニュース

触媒学会シニア懇談会

「農繁休業」に関わる想い出

竹平　勝臣

先日、ほぼ10年ぶりに友人Arnfinn G. Andersenがノルウェーから遣って来て、ここ東広島に数日滞在して、しまなみ海道へのドライブなどで旧交を温めた。Arnfinnのオスロでの SINTEF勤務時、私のつくばでの産総研（現）勤務時に4年間の共同研究を行ない相互に行き来したが、その後、彼は若くして血管造影剤の企業Nikomed（後にGEに吸収合併）に移り、以来マネージングの仕事を行っている。彼は私よりは14歳若くて、未だ現役であるが、今回は全くの私的な旅行であり、知人を訪ねてここ広島を皮切りに大阪、多治見、木曽、信濃大町、東京、つくばとほぼ2週間の旅程とのことであった。

近況報告に加えての諸々の昔話の中で、私が幼い頃に経験した「農繁休業」の話をしたところ、奇しくも彼もノルウェーで同様な経験を有していた。

先ず、日本の「農繁休業」である。伝統的に我が国の農家では現金収入を得るには稲（米）作と生糸（絹糸）用の繭を得るための養蚕しかなく、殆どの農家がそれなりの水田と桑畑を経営していた。特に、第二次大戦後の食糧事情の厳しい時代には、主食である米の恒常的な生産が必須であり、初夏の稲苗の植え付け（田植え）と秋の稲刈りの時期には、小・中学生にはそれぞれ1週間の学業休暇が慣習化しており、これを「農繁休業」と称していた。これは米作中心の農村ではほぼ全国的に行われ、その後、食糧が充足するに連れて無くなって来たようである。これに関連して、米穀配給通帳が戦前の昭和17年から食糧管理制度の下で米の配給を受けるために発行され、旅館に泊まったり進学で下宿をしたりする際には提出が義務付けられていたが、昭和56年の食糧管理法の改正により廃止されている。戦前においても食糧事情は厳しかったが、「農繁休業」が行われていたとの情報は無い。

敗戦後のこの時期に農村での生活を経験された人にとっては、農業への関与の直接・間接を問わず「農繁休業」は馴染のある言葉であろう。私は昭和17年に愛媛県の南部、東宇和郡下宇和村（現：西予市宇和町：未だになじめない大合併後の名前である）に生まれて、敗戦後の昭和23～32年間を村立の小・中学校の生徒として過ごした。当時の稲作は役牛を使っての犂による田起こし、「飛行機」（両翼を有する代掻き機）による代掻きの後に、別途苗代で育てた稲の苗を採り、梅雨時の降雨を待って水を張った田圃に一斉に植え付け（田植え）、夏季の除草に水回りの管理さらには施肥を経て、稲穂の実りを待って、秋の小・中学校の運動会の終了後に一斉に稲を刈り取り籾を収穫した。

牛と犂による田起こし

これらの作業はほぼ全てが人力で行われた。その後各戸に蓄えられた籾は旧式の石油発動機を動力源とする大型の籾摺

り機が順番に各農家を回って脱穀され玄米となって収納された。これらを完結するには、家族総出での集中作業が必須であり、まさに猫の手を借りる忙しさで、子供といえども立派な働き手であった。私自身も中学生時代に牛に曳かせた犂を使って田起こしをし、「飛行機」で代掻きをし、田植えや稲刈り、さらに籾摺りなどの作業では時間との戦いとなり、早朝から始めた仕事が星空の下で終わることも多かった。

現在では、農業協同組合（農協）を通じてトラクター、田植機、コンバイン、脱穀機等の大型装置が各農家に頒布され、機械化が進み省力化が進んでいる。しかし、農家にとっては極めて高額の初期投資が要求され、且つその費用の回収は農協を経る米の販売や肥料価格の統制により極めて効率が悪い。極論すれば、農協では若い職員が金融などのデスク・ワークに勤しみ、稲作農業の現場では高齢者のみが汗を流しているのが現状である。国の農業施策にも現場意識が徹底して欠如しており、まさに農協あるいは国による農業の“簒奪”が行われて、我が国の農業は危機に瀕している。農業政策が“NO政”と称される所以である。長い歴史の中で、日本の稲作農業は集約化が進み、極めて効率的に高品質の米を生産できるところまで来ている。また、先達たちが汗を流して開拓した各地の水田は、我が国の自然環境保全のためにも大きく役立って来た。しかし、今やこれらの水田の多くが耕作放棄され、雑草や灌木が生い茂る荒野と化している。決して太平洋対岸の国を対象としたTPP対応のための大規模農業への転身のみが解決策ではない。多様な稲作文化を有するアジアの各国をも対象として、知恵を絞ってこの優れた稲作技術を活かすことも考えるべきであろう。

私事ではあるが、篤農家であった亡き父は戦前から営農の傍らで賀川豊彦先生に私淑して営農改善などを目標として活動をしていた。賀川先生は大正・昭和期に活動したキリスト教社会運動家であり、国内でよりむしろ国際的に知名度が高く、ノーベル文学賞および平和賞の候補になったこともある。戦前日本の労働運動、農民運動、無産政党運動、生活協同組合運動等において、重要な役割を担った人物で、日本農民組合の創設者でもある。

賀川　豊彦

私は昭和42年に新宿初台にあった旧東京工業試験所に入所し、京王線沿線の上北沢に下宿したが、その近くには松沢教会があり、賀川先生の活動の拠点の一つであった。後に偶然の機会で知ることとなったが、そこには父の行動記録が残っていた。

その後、父は一銭五厘の召集令状により徴兵されたが、運よく外地に派遣されることなく敗戦を迎え、帰郷後は農村の自立にと農協の立ち上げに努力したようである。これが軌道に乗った後は農協を離れて、農林省食糧庁の下部機関である食糧事務所に勤務し、同時に農業を兼業していた。但し、父の農業への取り組みは単なる兼業農家のそれではなく、従来からの米つくり、養蚕はもとより、栗、クルミ、ペカン、ポポー、リンゴなどの種々の果樹の栽培を試み、イチゴやお茶を栽培し、牛、羊、山羊などの飼育を試み、休日はもとより出勤前・後にも農作業に励むなど、極めて勤勉で且つ細心のものであった。農業協同組合はその組織名に見られるとおり、本来が各地方での営農の独立を目指す農民の想いに基づいて創設された連合組織である。それにもかかわらず、農協が初心を忘れて巨大化、肥大化してお役所になっていくのを、亡父は常々嘆いていた。

もう一つの現金収入源であり高い収益性を誇った養蚕も、化学繊維の普及と安価な中国製品の出現によって、わが故郷のみならず全国的にも衰退した。このことは富岡製糸場が絹産業遺産群として世界文化遺産に指定されたことにも見られるとおりである。元々、中国で発達した絹織物はシルク・ロードを経て西に運ばれると同時に、正倉院御物に見られるように東の日本にも届いたが、その後、東と西の両端に位置する日本とフランスとで養蚕と絹織物産業が発展した。

蚕と桑の葉

繭

フランスでは中世からリヨンを中心に威厳、豪華さの象徴として王侯貴族のための絹織物が生産され、日本でも西陣織、加賀友禅、黄八丈などのように各地で高価な絹織物が生産された。また、わが国で明治から大正にかけて生産された高品質の生糸は、先ずはフランス、次いでアメリカに輸出されて外貨獲得に大きく貢献した。私の幼少時の記憶に残っている養蚕は春から秋にかけて数回行われ、各農家では最上席の座敷に「お蚕様」と呼ばれて蚕棚が鎮座していた。春になって桑の葉が伸び始める頃に、卵から孵化した小さい幼虫（蟻蚕）が各農家に配られるが、ほぼ25日間桑の葉を食べさせると、4回の脱皮を行って成虫となり繭を作り始める。およそ2日で繭作りを完了し，さらに2～3日で繭の中で脱皮して蛹となるが、この段階の繭を生糸の原料として出荷するのである。さらに、蛹は約10日で成虫（蛾）となり，繭から出てきて交尾して500粒位の卵を産むので、これから第二回の養蚕が開始される。これが反復されるので、飼料の桑の葉が採取できる間は年間複数回の繭の生産が可能となる。但し、蛾の産卵と蟻蚕の育成は各農家では行えないので、専門業者が行う。かくして、各地で繭を煮て生糸を引き出し巻き取るための製糸工場が建設され、多くの女工さんが集められて大量の生糸が生産された。副生物である蛹は肥料などとして利用された。

我が国での養蚕はほとんどの地域で衰退したが、特異な形で養蚕産業が残っているのが、わが故郷の西予市宇和町の隣町、野村町である。山間部に広がる傾斜地を利用して桑を栽培し、明治初期から始まった野村町の養蚕は、大正、昭和期に収益性の高い産業として急速に普及したが、その後、他の地域と同様、一時大きく衰退した。しかし、ここ10数年の間に徐々に復活して、細々ながら野村町は「シルクの町」として知られるようになった。同町のシルク博物館には、昔ながらの伝統を受け継ぐ絹織物の資料や、明治初期に始まった蚕糸業に関わる歴史的資料、生産の際に使用した道具などが展示されている。野村町の生糸は、「カメリアシルク」の商標で京都などに販売され、また、20年に一度行われる伊勢神宮式年遷宮の御用生糸の使命を担い、伝統を守っている。

さて、ノルウェーの「農繁休業」である。ノルウェーでは大麦、小麦などの穀類も生産するが、北欧の国の常として主要な食物としてジャガイモが挙げられる。今でこそその生産には機械化が進んでいるが、かってはその植え付けと収穫は全くの人力に頼っていた。わが国ではジャガイモはほぼ

全国で栽培され、温暖地では秋に種芋を植え付けて冬を越し翌年の春に収穫する。北海道などの寒冷地では積雪も多く種芋は屋外では冬を越せないので、春に植え付けて秋の収穫を待つ。カムチャッカ半島よりも高緯度に位置するノルウェーであるが、メキシコ湾流の影響で大陸の国ほどの厳しい寒さは無い。それでも北国のノルウェーではジャガイモを産するのは南部地方に限られ、春の植え付けで秋の収穫となる。山間地の多い我が国でも農耕地が国土全体に占める割合は23.3%であるが、ノルウェーでは5.6%に過ぎない。

Arnfinnはオスロから車で1.5時間程度のスウェーデンとの国境に近い東南部地方で生まれ幼少期を過ごしたが、秋のジャガイモの収穫期には小・中学生時代に1週間の「農繁休業」があったとのことである。但し、ノルウェーでは小学校は6～13歳の7年間、中学校は13～16歳の3年間を過ごす。ノルウェーは第二次大戦時にはナチス・ドイツに占領されて、ハンザ同盟以来の南部のベルゲン（Bergen）あるいは中央部のトロンハイム（Trondheim）などの良港がUボートの基地などに使用された。ドイツ軍がノルウェーに侵攻した大きな理由は、スウェーデンの鉄鉱石であり、冬季はバルト海北部が凍結するためにノルウェー北方のナルヴィク（Narvik）を経て船で運ばれるスウェーデン産の鉄鉱石に大きく依存していたからである。この隣国スウェーデンが鉄鉱石の産地であることなどからドイツと友好関係を結び、ドイツの侵攻作戦の外におかれたことは皮肉なことである。また、もう一つの隣国デンマークはノルウェーと同時に、正確にはやや先だって、ドイツにより侵略されたが、ドイツ軍による占領を認める代わりに内政はデンマーク自身が行うことを条件として、僅かな戦死者を出したのみで戦闘を終了させた。しかし、ノルウェーの置かれた地政学的条件はこれらの国とは大きく異なる。ノルウェーの航空基地からはドイツの偵察機は北大西洋上空を遠くまで活動でき、ノルウェーから出撃するUボートや水上戦闘艦は北海のイギリスの封鎖線を破りイギリスへ向かう船団を攻撃することが可能であった。国を挙げての抗戦もむなしく、1940年4月9日のドイツ軍のオスロ侵攻から6月8日のナルヴィク陥落の間に南から北までのノルウェーの主要な港湾がナチス・ドイツの占領下に入った。北海対岸のイギリスを基地としてレジスタンス活動が行われたが、全盛期のナチス・ドイツには抗すべきもなかった。但し、彼らの名誉のために付け加えるならば、ノルウェーは、ソ連を除けばドイツ軍の侵攻に最も長く抵抗した国であった。多人数のドイツ占領軍とUボートを初めとする大量の軍備の維持に必要な膨大な物資がノルウェー国内で調達され、結果として占領軍により簒奪されたノルウェーでは戦争終了後の復興に長時間を要したのは無理もないことであろう。Arnfinnは、ノルウェーよりも、連合軍により徹底的に破壊されたドイツの方が、復興が速やかだったと苦笑していた。尤も、ノルウェーの総人口は現在でも1千万強で、その半数の5百万強が南部のグレート・オスロ圏に集中しており、北部の厳しい自然条件を考えると、復興に時間を要するのもやむを得ないことかも知れない。そのような条件下で大戦後の食糧事情は、我が国以上に厳しいものがあったであろうし、主食のジャガイモの恒産のために「農繁休業」が行われたこともよく理解できる。しかも、私より14歳も若いArnfinnが「農繁休業」を経験したということは、大戦後の復興に長

い年月を要したことを如実に示している。1年間の主食であるジャガイモの収穫は、わが国の米の収穫と同様にまさに生命を維持するための重要な農作業であった筈である。

因みに、Wikipediaによれば、現在のノルウェーの経済は、2008年の名目GDP換算では約2兆5432億NOK（約4518億USD）で世界24位であるものの、1人当たり名目GDP換算では約532千NOK（約94,400USD）となり、世界2位になる。第二次世界大戦後、社会福祉に注力した結果、スウェーデンやデンマークといった他の北欧諸国と同じく福祉国家となっている。電力や石油、ガス、金融業といった重要産業の企業にノルウェー政府が株主となっており、混合経済の色彩が強い。1960年代に北海油田が開発されて以降、欧州諸国の中では、資源国の一員となっており、1972年の欧州共同体加盟、1994年の欧州連合加盟も国民投票で否決されているため、EUの経済に密接に結びついているにもかかわらず、スイスと同様に一線を画した位置にいる。また、石油、天然ガスといった天然資源は早晩、枯渇すると予測されているため、石油収入は次世代の国民にも活用できるよう、ソブリン・ウエルス・ファンドであるノルウェー政府年金基金が資産運用を行う一方、石油資源に依存しない産業の育成が課題となっている。我が国の最近の放漫な政治・経済のあり方と比較すると、極めて着実な施策であることが良く理解できる。

次いでながら、ジャガイモから作った蒸留酒であるAquavitはギンギンに冷やして飲むとトロッとしていて北欧の脂っこい豚肉料理にはピッタリの絶品であり、共同研究を行った折にはSINTEF研究室自家製のAquavitで盛り上がったものである。なお、北欧にジャガイモが輸入されたのは、1756年にドイツで起こった7年戦争後であると言われる。戦争によってジャガイモが流入したことから、スウェーデンでは7年戦争は「ジャガイモ戦争」とも呼ばれている。同時期にノルウェーにもジャガイモが流入したはずであり、恐らく、この戦争以後にジャガイモが主原料のAquavitが北欧で主流になったと思われる。Aquavitの語源は、ラテン語のAqua Vitae（命の水）であり、ゲール語のwhisky、ロシア語のводкаと同じ意味である。なお。今回の訪問でArnfinnは土産として極上のAquavitを一瓶持参してくれた。いずれ美味しい豚肉料理で賞味したいものである。

この地方での、もう一つの現金収入を得るための農作物はイチゴであった。イチゴの収穫においては品質・鮮度を維持するために、最適収穫時期を外すことは出来ない。また、雨にぬれると商品価値が半減する。イギリス同様にメキシコ湾流の影響を受けて降雨量の多いノルウェーでは、好天を求めての慌ただしい作業であったはずである。Arnfinnの御父君は大工さんで、セメント工場での枠組みを作る仕事を業務としておられたが、別途ジャガイモよりは収益性の高いイチゴの生産にも注力されていたとのことである。イチゴは日本国内でも収益性が高く、私の田舎でも父は亡くなる前まで母と共にイチゴ生産に励んでいた。米作には農閑期であり、且つ収益性の高いクリスマス～正月の端境期を狙ったイチゴ生産をハウス栽培で行っていたが、寒い時期に老夫婦がイチゴの箱詰めに勤しんでいた姿を思い出す。ノルウェーでのイチゴ生産は初夏から秋にかけてのはずであり、友人たちは空を眺めながら美しく結実したイチゴの摘み取りに勤しんだことであろう。但し、このイチゴ摘みには「農繁休業」は無かったようである。

以上は農家に生まれながら農業を離れ、それでも農業と田舎の生活にノスタルジーを抱え続ける老兵の繰り言です。かって、農業国であるフランスに留学・滞在した折に、殆どのフランス人が3代前はPaysan（日本語に翻訳すると“農民”というよりは“百姓”という言葉がピッタリでしょう）だったとの言葉を聞いたことがあります。フランスではその規模こそ日本より大きい農業経営が行われてはいますが、お百姓さんたちは自分たちの農業を守るためには団結してトラクターで道路を封鎖し、堆肥を道路に撒き散らすまでの闘争を行います。日本では如何でしょうか。“百姓”の生活は常に自然との対話の中で行われ、台風あるいは最近では異常気象による思わぬ被害もありますが、人間の生活が如何に自然

の恵みを受けて成り立っているかが実感できます。AIにロボットなど、先端技術の開発を目指す世の潮流は然は然りながら、最も基本的な人間の営みをもう一度見直すことも重要ではないでしょうか。

2016.08.31